

作品発表

「心を浮かべて2014」

With Mind Released

林 亨

北翔大学教育文化学部芸術学科

今回掲載した作品は、2015年3月10日（火）－3月31日（火）にポルトギャラリーで開催した展覧会「Cautics：メディアムが光と出会うとき」に出品したものである。この展覧会は、本研究グループの成果報告展であるが、昨年度から、研究員でインデペンデントキュレーターの塚崎美歩氏による企画展覧会として開催している。この展覧会のキーワードは「光」である。しかし、最近の筆者の主な制作テーマは「水」であり、必然的に「光」と「水」の関係性に興味を持って制作することになった。

昨年、水に関して興味深い話を聞いた。栃木県那須高原で開かれた「山のシューレ」^(注1)で行われた講演である。講師は、宗教人類学者の植島啓司氏。全体テーマは、「聖なる場所の力」。講演のテーマは、「場所や土地を新たな視点から問い直す」。今回の掲載作品は、この講演の内容が大きく影響を受けているので概略を記すことにする。

まず印象に残った話しは、人類誕生から人類が世界に拡散する過程で、その移動経路が陸路ではなく海路、つまり海を渡っていったのではないかという仮説である。陸路は人間にとっては危険だった。思想家のバックミンスター・フラーなどが述べた「世界の主要な文明はすでに公海によって結ばれており、海によって人々は頻繁に交流していたのではないか」と言う説やミャンマー中西部でおよそ4千万年前の霊長類の化石が見つかった事実を紹介しながら、霊長類は、東南アジアで進化して西アジアやアフリカに広がったのではないかというのである。ユーラシア大陸の「端」と位置づけられる東南アジアが、じつは文明の中心であった。東南アジア大陸のようなものがあって、氷河期が終わって多くの島に分かれていく。そうして新たにできた川に沿ってさらに人類が移動していく。人類の歴史においては、いつの時代でも移動する人々が文化のイニシアティブを持つものとし、日本支配階級への話しへと進んでいく。「倭人」「龍神信仰（伝説）」「龍穴」「聖地」など、いずれも興味深い内容であった。

なぜこの講演の内容が筆者にとって重要なのか。それは、水というものが、これまで考えていた関わり方を遙

かに超えて、自分により近いものであり、かつ遠く大きな存在であるという両面性を強く気付かされたからである。また、日常生活や環境の問題、あるいは生物学的な問題だけでなく、水の存在について、芸術を生み出す根本的な文明論のようなものへ考えを巡らせる楽しみを感じたからであろう。たとえば「縄文人は海の民であった」とする説は、一見、歴史的な問題として捉えるであろうが、彼らが作った縄文式土器などの創造物と繋げて考えると、その造形の発想の起源を再考したくなる。

そこに光というテーマがどう絡んでくるのか。実は本誌4号の制作ノートにすでに述べているように、自作においては、光が絵画表現における身体性と繋がっていて、画面の中で光に見える蛍光色の筆触が、視覚だけでなく、鑑賞者の身体にシンクロするような装置になっていることを再確認した。水がもたらす発想の転換が、光の象徴としての形体や筆触でなく、より身体性を強化する表現になり得ないか、さらに試行錯誤を続けるつもりである。

(注1)

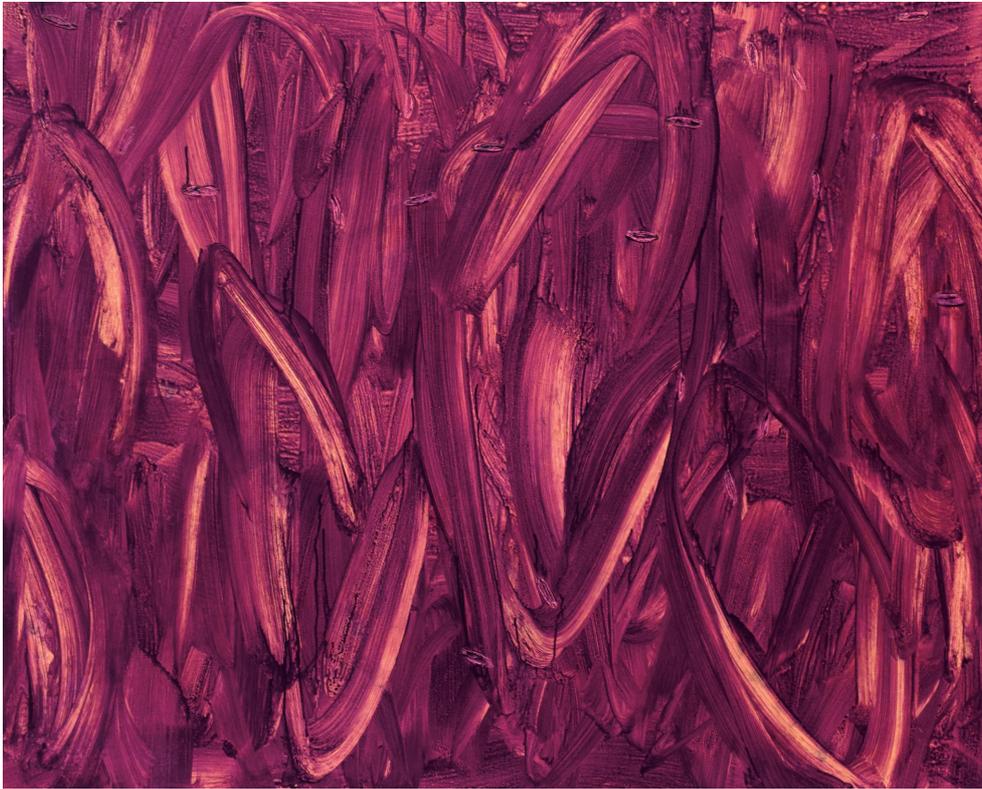
山のシューレとは、栃木県那須高原山麓・横沢地区で、2008年より毎年夏に開催される期間限定のサマーオープンカレッジ（山の学校）。主催は特定非営利活動法人アート・ビオトープ。シューレとはドイツ語で、「学校」を意味する。各界で活躍する様々な講師に招き、幅広い年代に向けて様々なプログラムを展開している。テーマは自然、芸術、哲学、経済学、文学、生物学、デザイン、音楽、建築学など多岐に亘り、講師と受講者が職業や領域、国境を超えて集い、交感する場所として、全国から多くの参加者が集まる人気イベントとなっている。（共催者である株式会社二期リゾートのHPを参照）

(本研究は、ポルト研究の助成を受けて実施された。)



心を浮かべて〈水と岩01〉キャンバスにアクリル 130×162 2015

With Mind Released (water and sacred rock 01) acrylic on canvas 130×162cm 2015



心を浮かべて〈水と岩02〉キャンバスにアクリル 130×162 2015

With Mind Released (water and sacred rock 02) acrylic on canvas 130×162cm 2015